

一般国道 322 号八丁峠道路建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書

# 野鳥遺跡

—福岡県嘉麻市大力所在遺跡の調査—

2012

九州歴史資料館

## 序

福岡県では、平成 20 年度に国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、一般国道 322 号八丁峠道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は嘉麻市大力に所在する野鳥遺跡の調査の記録です。

遺跡の所在する嘉麻市は平成 18 年 3 月 27 日に合併して誕生した新しい市で、本遺跡は旧嘉穂町にあたります。遺跡のすぐ西側には中近世以降の主要道路である「秋月街道」が通っており、北側の千手の集落は宿場町としての名残が今も残ります。

今回の発掘調査では狭小な面積ながら、中近世の集落跡が見つかり、街道の往来が盛んだった頃の重要な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。深く感謝いたします。

平成 24 年 3 月 26 日

九州歴史資料館  
館長 西谷 正

## 例言

- 1 本書は、一般国道 322 号八丁峠道路建設事業に伴って発掘調査を実施した、福岡県嘉麻市大方に所在する野鳥（のとり）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。整理作業は同事務所の委託を受け、九州歴史資料館が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真の撮影は城門義廣が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
- 4 本書に掲載した遺構図の作成は、城門が行い、発掘作業員が補助した。
- 5 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、小池史哲の指導の下に実施した。
- 6 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 7 本書に使用した分布図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図「大隈」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
- 8 平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
- 9 本書の執筆・編集は城門義廣が行った。

## 目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	4
III	発掘調査の記録	8
1	遺跡の概要	8
2	土坑	8
3	段落ち	9
4	その他の遺構	11
IV	おわりに	11

## 図版目次

図版 1	1. 遺跡上空より古処山系を望む（北から）	2. 遺跡上空より嘉穂盆地を望む（南から）	
図版 2	1. 1号土坑（西から）	2. 1号土坑完掘（西から）	3. P-1 出土状況（西から）
図版 3	出土遺物		

## 挿図表目次

第 1 図	野鳥遺跡の位置	1
第 2 図	周辺遺跡分布図（1 / 25,000）	3
第 3 図	調査区周辺地形図（1 / 5,000）	6
第 4 図	調査区遺構配置図（1 / 150）	7
第 5 図	土坑実測図（1 / 30）	9
第 6 図	出土土器実測図（1～9 は 1 / 3、10 は 1 / 4）	10
第 7 図	P-1 遺物出土状況実測図（1 / 20）	11
第 8 図	土製品・銭貨・石臼実測図（1～3 は 2 / 3、4～6 は 1 / 4）	12
第 1 表	出土遺物一覧表	13

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

嘉麻市と朝倉市秋月を結ぶ八丁峠は、中世からの主要幹線道路の一つである。しかし、現在の国道 322 号八丁峠は、道路幅員が狭くカーブも多く、急峻であるため車の離合も困難な場所である。また、夏季には多量の雨による災害、冬季には積雪や凍結等によって通行規制がかかることが多く、非常に不便な場所となっている。これらの通行規制を解消し、幹線道路としての機能を確保するために、平成 18 年度から国土交通省によって事業が開始された。

道路建設に先立ち、平成 20 年 3 月に埋蔵文化財の取り扱いについて、国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所より福岡県教育庁総務部文化財保護課に照会があった。事業地内は、トンネル坑口部分が旧秋月街道にあたることなどから、試掘調査を実施することとなった。

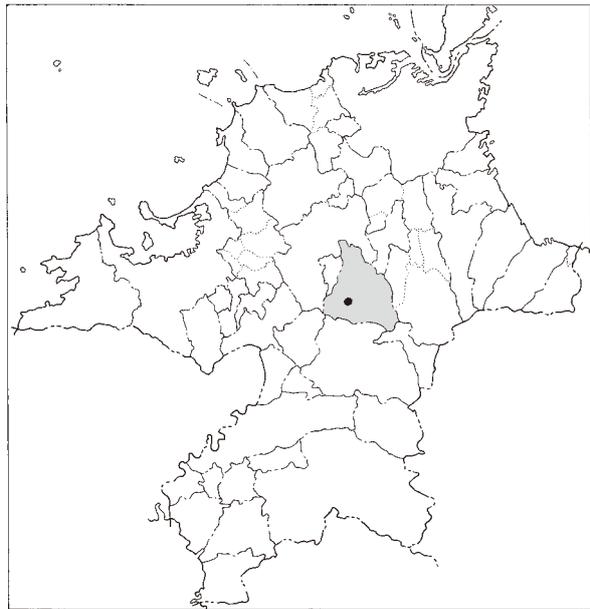
本調査対象地を含む、坑口手前の高台部分の試掘調査は、平成 20 年 10 月 14 日・15 日両日に実施した。試掘調査では、比較的低い場所にある田部分では河川堆積物が厚く堆積しており、文化財は確認されなかった。一方、対象範囲の中で最も標高が高い田畑、約 650 m<sup>2</sup>部分においては、ピット等の文化財が確認されたため、工事着工前に本調査を実施することとなった。

## 2 調査の経過

発掘調査の実施にあたっては、平成 20 年 11 月に現地の確認を行い、併せて地元において作業員の募集を行った。翌 21 年 2 月 10 日にバックホーを搬入して表土掘削を開始し、同月 16 日には発掘機材等を搬入し、作業員による人力掘削を開始した。調査区南西側から北へ向けて遺構の検出・掘削を進めていたが、表土の掘削を行っていないところまで、遺構が広がっている可能性が高いことが想定されたため、19 日に再度バックホーを搬入し、表土掘削を行った。冬の冷たい小雨と強い風に悩まされながらも、20 日にはほぼ全ての遺構を掘り上げ、調査担当者が東九州自動車道建設事業に伴う発掘調査を行っていたこともあり、いったん中断した。その後、同月 27 日に調査を再開し、遺構面の清掃を行ったうえで、28 日に空中写真撮影を行った。しかし、担当者が同じ国土交通省北九州国道事務所の事業である、国道 201 号行橋バイパス建設に伴う発掘調査に入ったため再度中断した。そして、3 月 16 日に図化作業、写真撮影を行い、同日のうちに発掘機材撤収を行った。

なお、秋月街道部分については平成 22 年 5 月 27 日に人力による確認調査を行った。以下にその際の記録を一部転載する。

調査地点は、秋月一千手間、八丁越えなどと称される部分であり、調査地点の南側、山頂付近および秋月側では一部石畳が発見されている。調査は人力で、6 本のトレンチを設定した。ト



第 1 図 野鳥遺跡の位置

レンチ設定箇所以外の山林部分については、急傾斜であるため掘削を行わず、踏査を行った。

秋月街道（現道）部分に3本のトレンチ、街道から千手川までの平場部分に同じく3本のトレンチを設定した。

街道上のトレンチでは表土直下で黄橙色砂質土の地山が検出された。南端トレンチの東側には石英を中心とした礫がやや多く認められた。中央部トレンチの表面には道路部分のみ5～20cmと大きさが不揃いな礫がまばらに認められた。北端トレンチの西側は岩盤の風化した小礫が多く、東側はやや大きめの礫が多く見られた。各トレンチとも波板状等の痕跡および遺物は発見されなかった。平場部分では表土下20～40cmで黄橙色砂質土の地山が検出された。遺構・遺物ともに発見されなかった。山林部分については、踏査を行ったが遺構・遺物ともに発見されなかった。

道路部分については、一部礫が見られる部分があるもののほとんどが岩盤の風化礫であり、意図的に並べたような様子は認められなかった。このことから、石畳のような人為的に置いたものではなく、本調査の必要はないとした。

### 3 調査の組織

平成20年度の発掘調査関係者及び平成23年度の整理作業関係者は以下のとおりである。23年度は組織改革により、調査業務が九州歴史資料館に移管し、整理報告を行っている。

#### 国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所

	平成20年度	平成23年度
所長	後田 徹	世利正美
副所長	柳田誠二	上村一明（～8.31） / 大成和明（9.1～）
建設監督官	伊藤浩和	猪狩名人
調査課長	池田稔浩	大榎 謙
専門職	渡辺幹夫	渡辺幹夫
専門調査員	徳重俊博	徳重俊博（～8.31） / 秋田賢一（9.1～）
国土交通技官		山本陽子
工務課長	今田一典	谷川征嗣

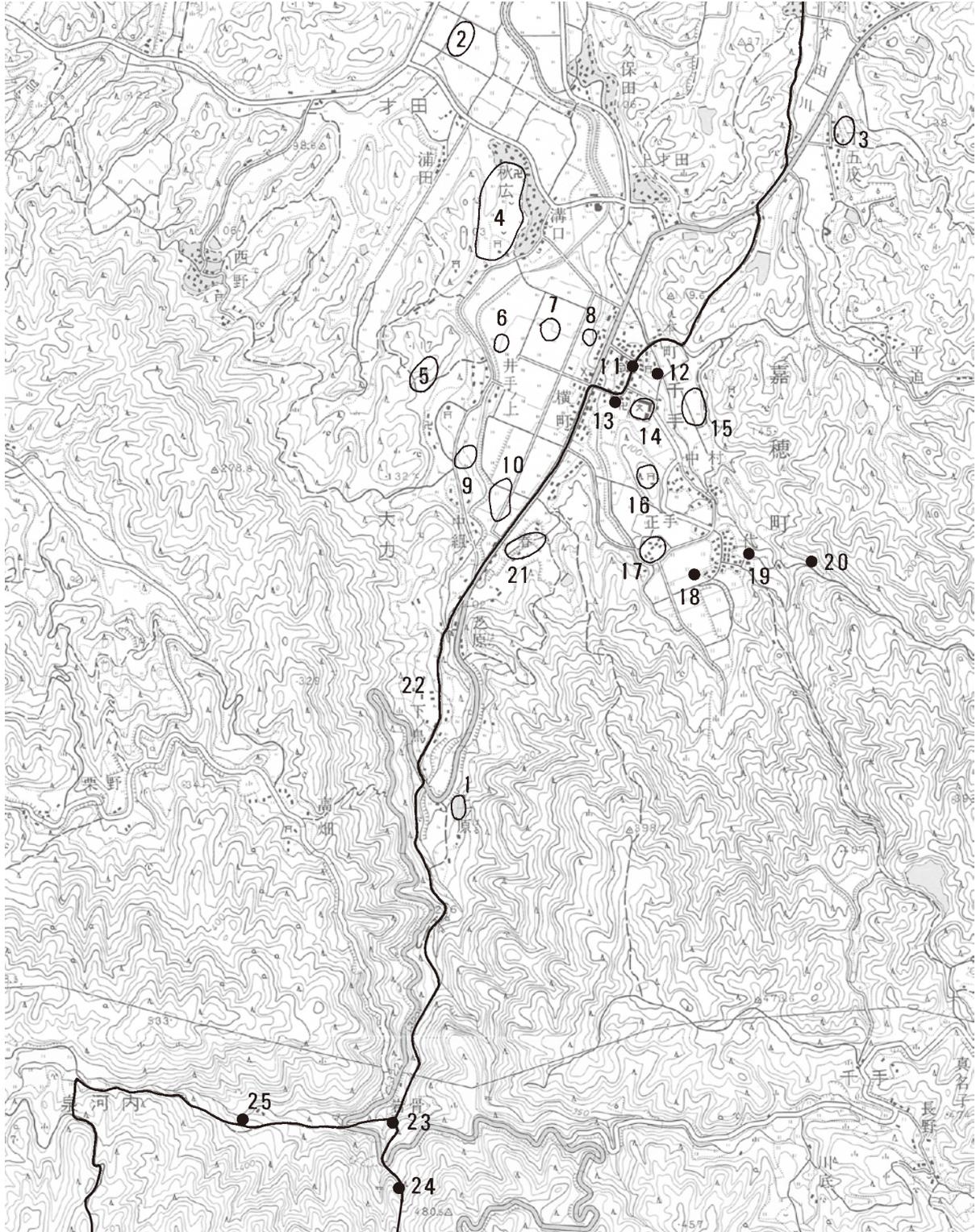
#### 福岡県教育委員会・九州歴史資料館

	平成20年度（教育庁）	平成23年度（九歴）	
総括			
教育長	森山良一	館長	西谷正
教育次長	檜崎洋二郎	副館長	南里正美
総務部長	荒巻俊彦	総務室長	圓城寺紀子
文化財保護課長	磯村幸男	文化財調査室長	飛野博文
副課長	池邊元明	文化財調査班長	小川泰樹
課長補佐	前原俊史	保存管理班長	加藤和歳
参事補佐兼調査第一係長	小田和利		
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文		
庶務			
管理係長	富永育夫		
主事	野田 雅	主任主事	近藤一崇

調査・整理

試掘担当	坂本真一	整理担当	小池史哲
調査担当	城門義廣	整理報告	城門義廣

なお、発掘調査・整理報告にあたっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、北九州国道事務所、嘉麻市教育委員会の関係者の皆様より御協力を賜った。記して感謝いたします。



1野鳥遺跡 2アナフ遺跡 3一丁五反遺跡 4才田遺跡 5大力古墳群 6イカマクチ遺跡 7アマダ南遺跡 8アマダ遺跡 9畑中遺跡 10大力遺跡 11旧千手宿  
12御荷塚 13旧大屋家住宅 14千手小学校校庭遺跡 15赤銅遺跡 16伝千手城跡 17正手遺跡 18長慶様 19千手寺遺跡 20元宮跡 21ハルダ遺跡  
22秋月街道 23旧八丁越・新八丁越分岐点 24旧八丁越石畳 25新八丁越石畳

第2図 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

## II 位置と環境

野鳥遺跡は福岡県のほぼ中央にあたる嘉麻市に位置している。同市は平成 18 年 3 月 27 日に山田市、稲築町、碓井町、嘉穂町の 1 市 3 町が合併して誕生した比較的新しい市である。面積は 135.18 km<sup>2</sup>を測り、北は飯塚市に、東は田川市、川崎町、添田町、西は桂川町、南は朝倉市、東峰村に接している。南部は標高 800 ～ 900 m 級の馬見山、屏山、古処山が連なっており、国指定の特別天然記念物であるツゲの原始林を含む、豊かな森林が広がっている。北を除いて三方を山に囲まれており、隣接する飯塚市や桂川町などとともに嘉穂盆地と呼ばれている。盆地内には、馬見山に源流を發する遠賀川が北流しており、同河川およびその支流により大小の丘陵や小平野が形成されている。

野鳥遺跡の本調査地点は嘉麻市の南側、旧嘉穂町にあたり、嘉穂盆地の南端、小単位で言えば千手盆地に位置する。千手盆地は県内第 2 位の一級河川である遠賀川の支流である千手川と横町川、本町川によって形成されており、調査地点の北側には狭小な扇状地が見られる。また、千手川をさらに北流した、才田、九朗原地区にはややまとまった平野が存在している。古処山北東部には、長野高原地帯が位置しており、多くの丘陵が千手盆地へと伸びており、扇状地および丘陵上に遺跡が見られる。

遺跡は一般国道 322 号の八丁峠に至る道の第 1 カーブを見下ろす丘陵上に位置している。古処山の北側に広がる千手盆地の基部付近、同山系に源を發し北流する千手川の東側、標高約 150m の河岸段丘上に位置する。調査地点のすぐ西側には古代から近世まで交通の要所となっている秋月街道が通っている。北側の扇状地との比高差は 30 ～ 50 m ほどあり千手盆地が見渡せる高台に位置している。

周辺の遺跡は大力の集落がある扇状地以北に縄文時代～弥生時代、中世を中心として展開しており、さらに秋月街道の周辺に関連した文化財が展開している。

縄文時代には大力に所在するアミダ遺跡がよく知られており、縄文時代後期～晩期を中心として住居跡や集石遺構、埋甕が検出されており、土器の他、石器、翡翠製の装飾品など豊富な遺物が出土している。同じく大力に所在する大力遺跡・畑中遺跡でも、包含層から縄文早期の押型文土器や、中期の竹管文土器、後期土器と通時的にキャンプサイトやベースとして利用されている。

弥生時代になると、北側の才田、九朗原地区周辺にも遺跡が展開するようになる。千手・大力地区には弥生時代前期末～中期前半の貯蔵穴や墳墓群が確認されている赤銅遺跡、細形銅剣が出土したとされる千手小学校校庭遺跡、前期・中期の集落であるイカマクチ遺跡・ハルダ遺跡が認められる。北側ではアナフ遺跡、江星遺跡で弥生時代中期の集団墓地と集落が見られ、特に前者では石剣・石戈・獣形勾玉などの副葬品が見つかっている他、墓前祭祀を行ったとされる丹塗磨研土器も出土している。

古墳時代になると丘陵上に古墳の造営がなされるようになる。大力盆地の西側には大力古墳群が、北側には集古墳群、尾根を挟んだ東側、遠賀川流域には久吉古墳群、杉坂古墳群が見られる。この他にも赤銅遺跡やイカマクチ遺跡、畿内系の外来土器が出土しているアミダ南遺跡で古墳時代の集落が見つかっている。

古代以降は先に述べたように、交通路としての秋月街道が整備され始めたとされる。中世になると、秋月氏の影響で城館が多数築かれるようになり、南側の山頂部には、古処山に秋月氏の本城である古処山城が築かれた。また、古処山の東側に尾根線で続く馬見連山から嘉麻峠に続くルートは中世に修験者により英彦山峰入りのルートになったとされ、そのルート上に2つの城郭が形成された。屏山の山頂部には屏山城があり、そこから3キロ東にある馬見山の尾根線上には茅城が築かれている。

千手・大力地区は文献で千手氏が治めていたとされているが、その居城と考えられる室町時代後半～末期の千手城がある。現千手八幡宮がある独立丘陵の頂上部に方形館状を呈した城郭で、空堀や高さ3mほどの土塁が囲んでいる。周辺には鎌倉～室町時代の集落である正手遺跡、14世紀後半～15世紀の寺院跡で千手氏の菩提寺とされる千手寺遺跡、平安時代末～鎌倉時代、室町時代前半の掘立柱建物跡が多数見つかっている赤銅遺跡が調査されている。千手寺は真言宗寺院であるが、伝承によると文明年中に破壊され、16世紀ごろには禅宗（曹洞宗）寺院として再興したとされ、現存している。発掘された遺構の上面には焼土層が存在し、礎石の一部は被熱していたことから焼失した可能性が高いと報告されており、同じような焼失建物は、正手遺跡でも15世紀代のものが見つかっていることから、付近一帯が焼失した可能性も指摘されている。この他にも長慶様と呼ばれる五輪塔や御荷塚と呼ばれる宝篋印塔が周辺にあり、関連性がうかがえる。

近世になると周辺は千手宿として栄える。千手宿は慶長17年に黒田長政の命で町立てが行われ、秋月へ向かう八丁越の際に利用された。本町、横丁、横町に分かれている。現在でも芥田～千手の間では古い町並みならびに街道が残っており、その周辺には本町恵比寿像・横丁恵比寿像、寛保4年に建立された猿田彦太神や慶応年間に建てられたという旧大屋家住宅が今でも残っている。また、芥田の降参畑、秋月の刀鍛冶といった伝承や雁金納めと呼ばれる狂言、明治末期に植えられたという千手小学校のケヤキも今に伝えられている。遺跡より南側、山道に入ると雨乞いがなされたといわれる蛇淵という滝がある。さらに上ると新旧八丁峠ともに石畳が残っており、特に峠を越えた秋月側には多く残存している。調査された近世に属する遺跡としては、ハルダ遺跡で近世の掘立柱建物や土坑が検出され、陶磁器が出土している。

## 【参考報告書・文献】

秋月街道ネットワークの会編 2001『秋月街道をゆく』海鳥社

福島日出海編 1988『嘉穂地区遺跡群Ⅴ』嘉穂町文化財調査報告書第8集 嘉穂町教育委員会

福島日出海編 1989『嘉穂地区遺跡群Ⅶ アミダ遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第10集 嘉穂町教育委員会

福島日出海編 1990『嘉穂地区遺跡群Ⅷ』嘉穂町文化財調査報告書第11集 嘉穂町教育委員会

福島日出海編 1992『嘉穂地区遺跡群Ⅹ アナフ遺跡Ⅱ』嘉穂町文化財調査報告書第13集 嘉穂町教育委員会

福島日出海編 1993『嘉穂地区遺跡群ⅩⅠ』嘉穂町文化財調査報告書第14集 嘉穂町教育委員会

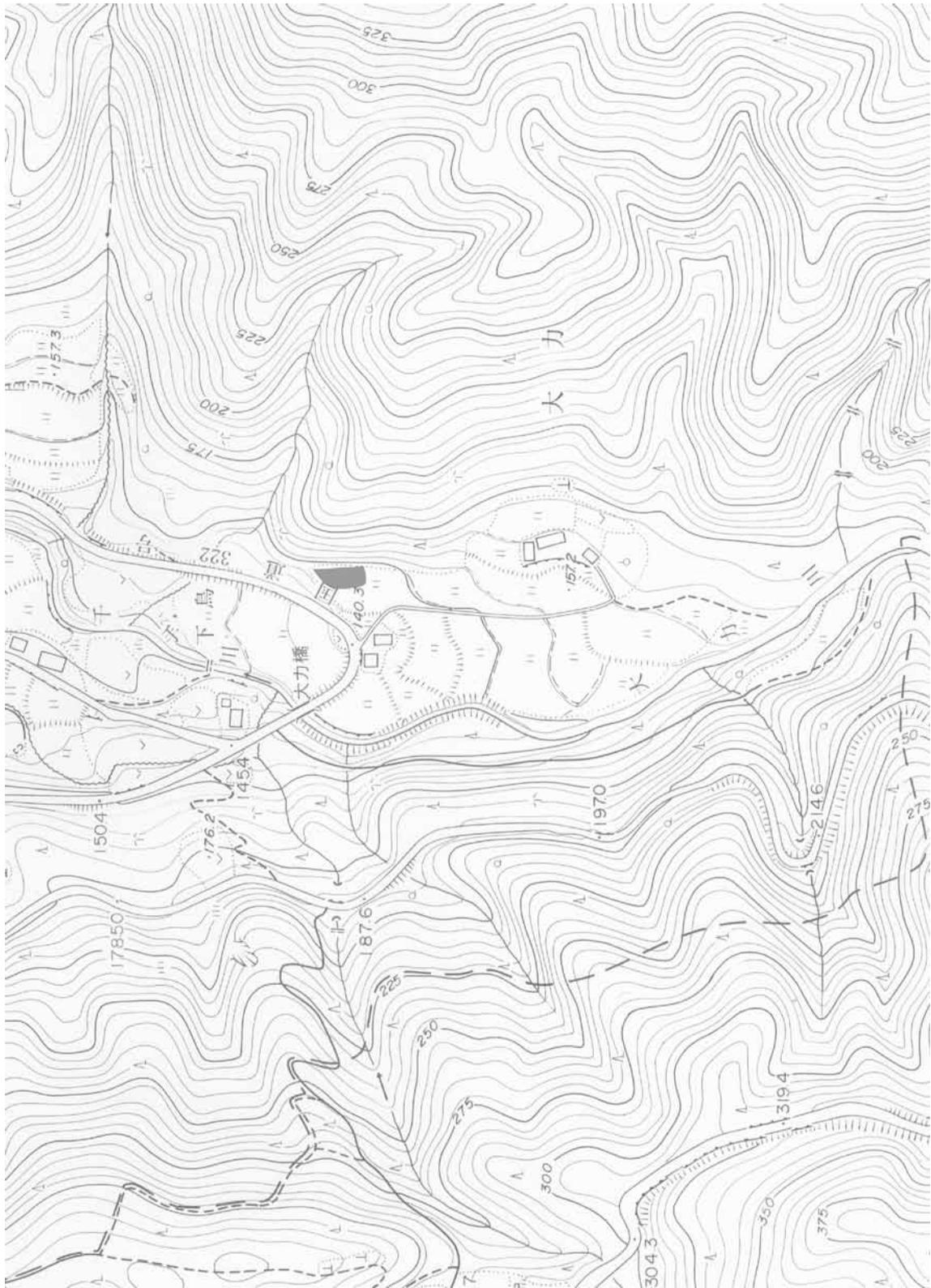
福島日出海編 1995『嘉穂地区遺跡群ⅩⅢ』嘉穂町文化財調査報告書第16集 嘉穂町教育委員会

福島日出海編 1996『嘉穂地区遺跡群ⅩⅣ』嘉穂町文化財調査報告書第17集 嘉穂町教育委員会

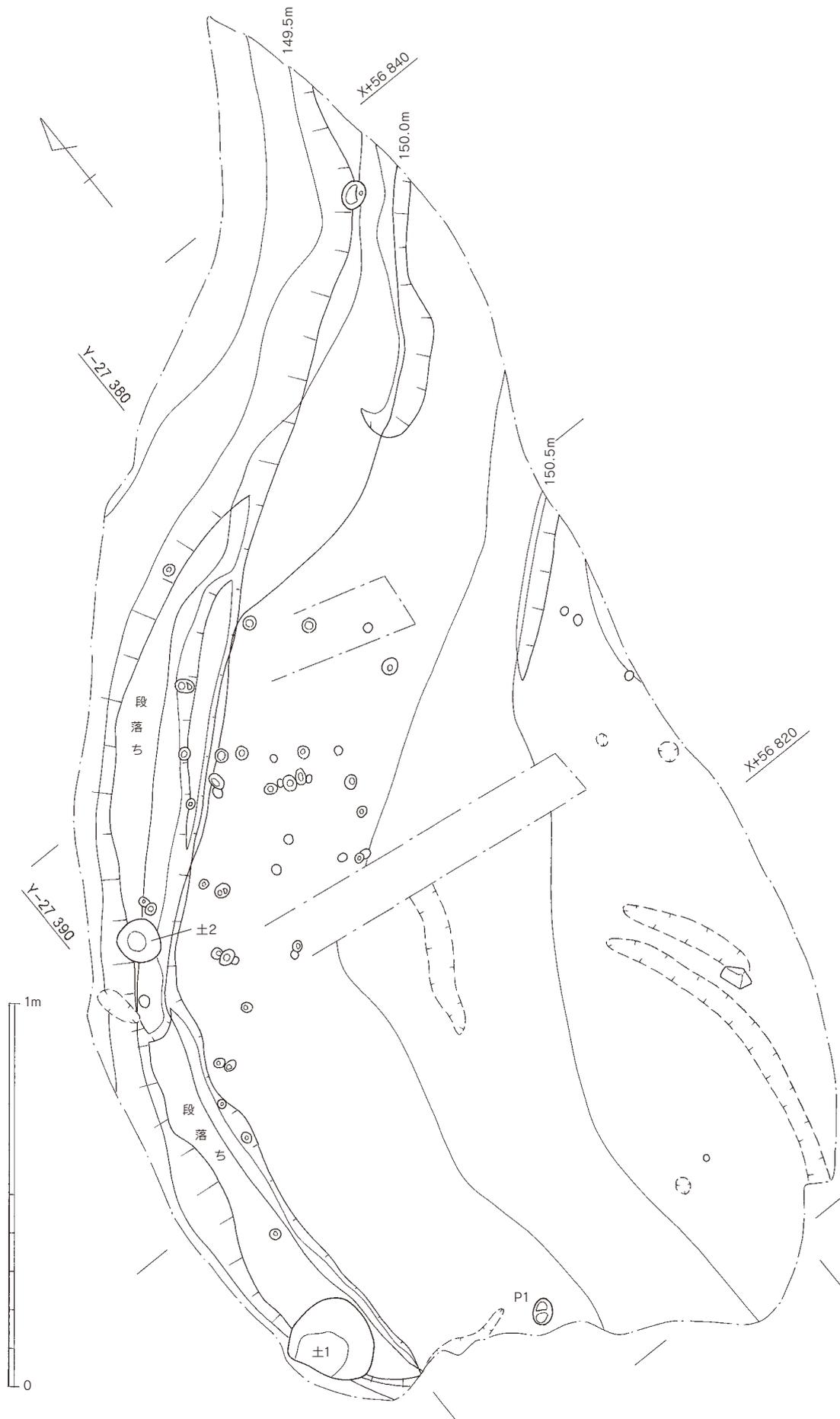
福岡県教育委員会 2004『秋月街道 歴史の道調査報告書第2集』福岡県文化財調査報告書第195集

松浦宇哲編 2007『臼井家古墓群』嘉麻市文化財調査報告書第1集 嘉麻市教育委員会

松浦宇哲編 2009『竹生島古墳』嘉麻市文化財調査報告書第2集 嘉麻市教育委員会



第3図 調査区周辺地形図 (1 / 5,000) .



第4図 調査区遺構配置図 (1 / 150)

### Ⅲ 発掘調査の記録

#### 1 遺跡の概要

本調査地点は、古処山系に源を発し北流する千手川の東側、河岸段丘上に位置している。調査区東側はほとんど遺構がなく、田の整備に伴い削平されたものと考えられる。調査地点の段下の田畑は試掘調査の結果、河川堆積物と考えられる土層が認められ、千手川により削平されているものと考えられる。調査地点下の段落ちも同様に削平のため遺構ならびに遺物は認められなかった。これらのことから、緩斜面だったものを田畑の整備に伴い段々にしたものと考えられる。調査区の遺構面は標高 150m 前後であり、発掘面積は 435 m<sup>2</sup>である。

調査区は 30 cm 程度の表土耕作土を除去すると黄橙色の遺構面が認められる状況であり、特に東側は表土自体も 5 cm 程度と薄く、遺構面にトラクターらしき二輪の痕が残っていた。調査区は南北 35 m 程度、東西 18 m 程度である。

検出された遺構は、調査区西側の段落ちと土坑、そしてピット群である。段落ち・土坑からは土師器・瓦質土器の他、土鈴が出土した。ピット群はほとんどが深さ 30 cm 以下のもので、建物の推定は出来ない。

遺物はこのほか石臼などが出土しており、攪乱からは近世の紅皿および明銭が出土した。遺物は全部でパンケース 1 箱分出土した。

#### 2 土坑

##### 1 号土坑（図版 2、第 5 図）

調査区の南側、西寄りに位置する。段落ちの中にあり、土坑のほぼ中心を段落ちの上端が通る。径 200cm、深さ 55cm ほどで播鉢状を呈する。西側は段落ちによってカットされる。花崗岩の礫が多数認められるが、底部からはやや浮いており、廃棄時に伴うものと考えられる。礫中から瓦質土器・土師器片が出土している。中世に属する。

##### 出土土器（図版 3、第 6 図）

1～3、10 は瓦質土器である。1 は鉢の口縁部破片である。口縁がやや内傾し、口縁下約 3.5cm のところに断面三角形の突帯を貼り付ける。外面は丁寧なナデを施し、内面には粗いハケ目を施す。2 は壺である。復元口径は 15.2cm で、肩部が強く屈曲し口縁部は垂直に近い。内外面ともにナデを施す。3 は播鉢である。復元口径は 26.6cm で、口唇部を粘土貼り付けによって肥厚させる。内外面ともにナデを施し、内面には約 5 cm ごとに 6 本単位の播り目を施す。10 は深鉢で、いわゆる奈良火鉢である。復元口径 39cm、脚部径 28.7cm、器高 35.45cm で、口縁部はほぼ垂直になる。口縁部から約 2、5、20、28.5cm のところで断面蒲鉾形の突帯を貼り付ける。外面はナデを施し、内面には一部ハケの痕跡が残る。脚は高さ 1.2cm、幅 9 cm の弧状を呈し、残存位置から推測すると 4 ヲ所にあったものと考えられる。胴部上側の 2 本の突帯間には、2 cm ほどの松皮菱のスタンプが 2 つ施されている。

##### 2 号土坑（第 5 図）

調査区の中央西よりに位置する。1 号土坑と同じく段落ち中にある。径 120cm、深さ 80cm ほどである。土師器・鉢と考えられる瓦質土器片が出土しているが、図化に耐えうるものはない。

中世に属すると考えられる。

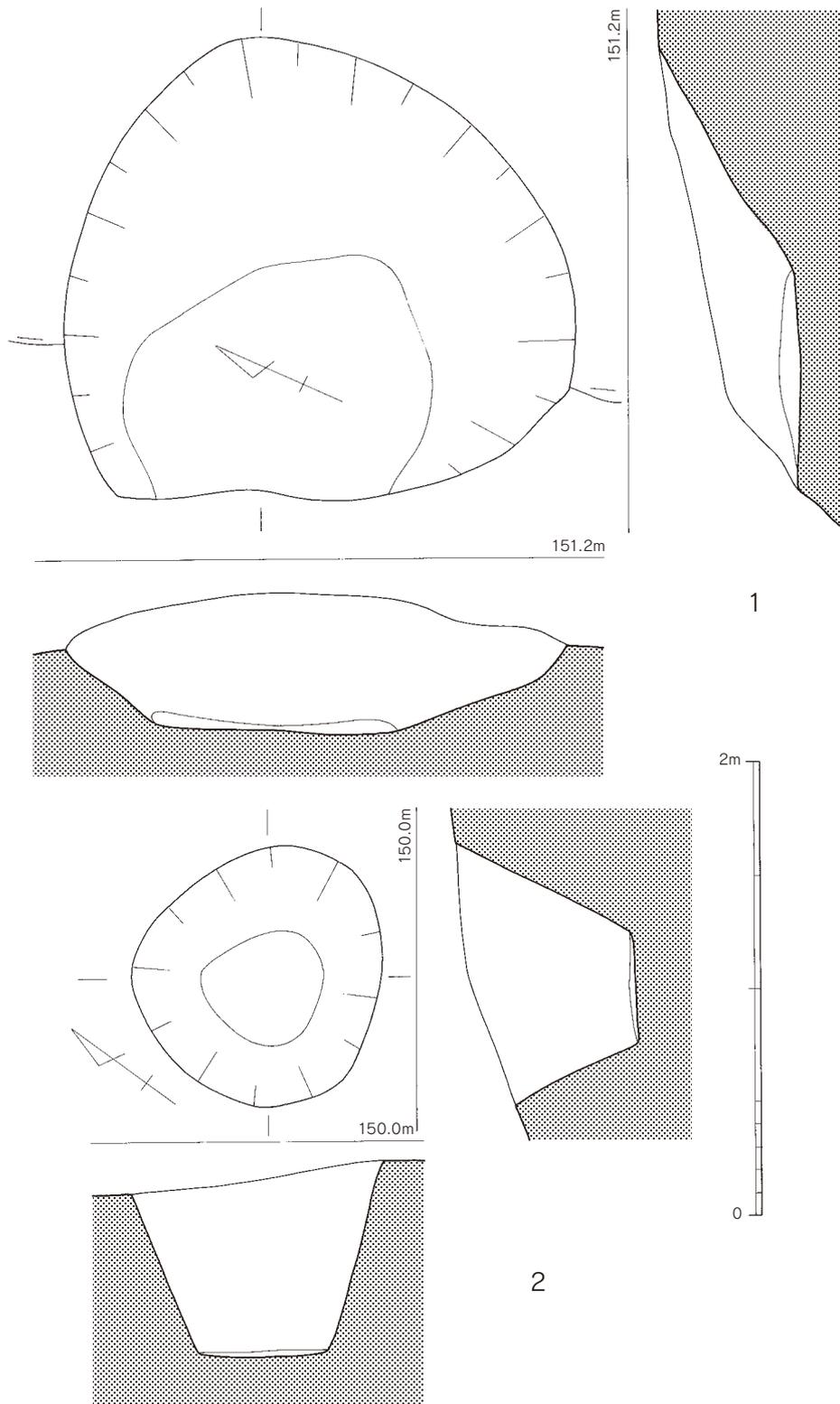
3 段落ち(SX-01)

調査区西側に沿って比高差50～75cmほどの段落ちが認められる。南端から25mほどはテラス状になっており、一部は3段になる。テラス幅は1.5～3mほどであり、テラス部分の埋土を中心に土師器・瓦質土器・石臼・土鈴などが出土している。

出土遺物(図版3、第6・8図)

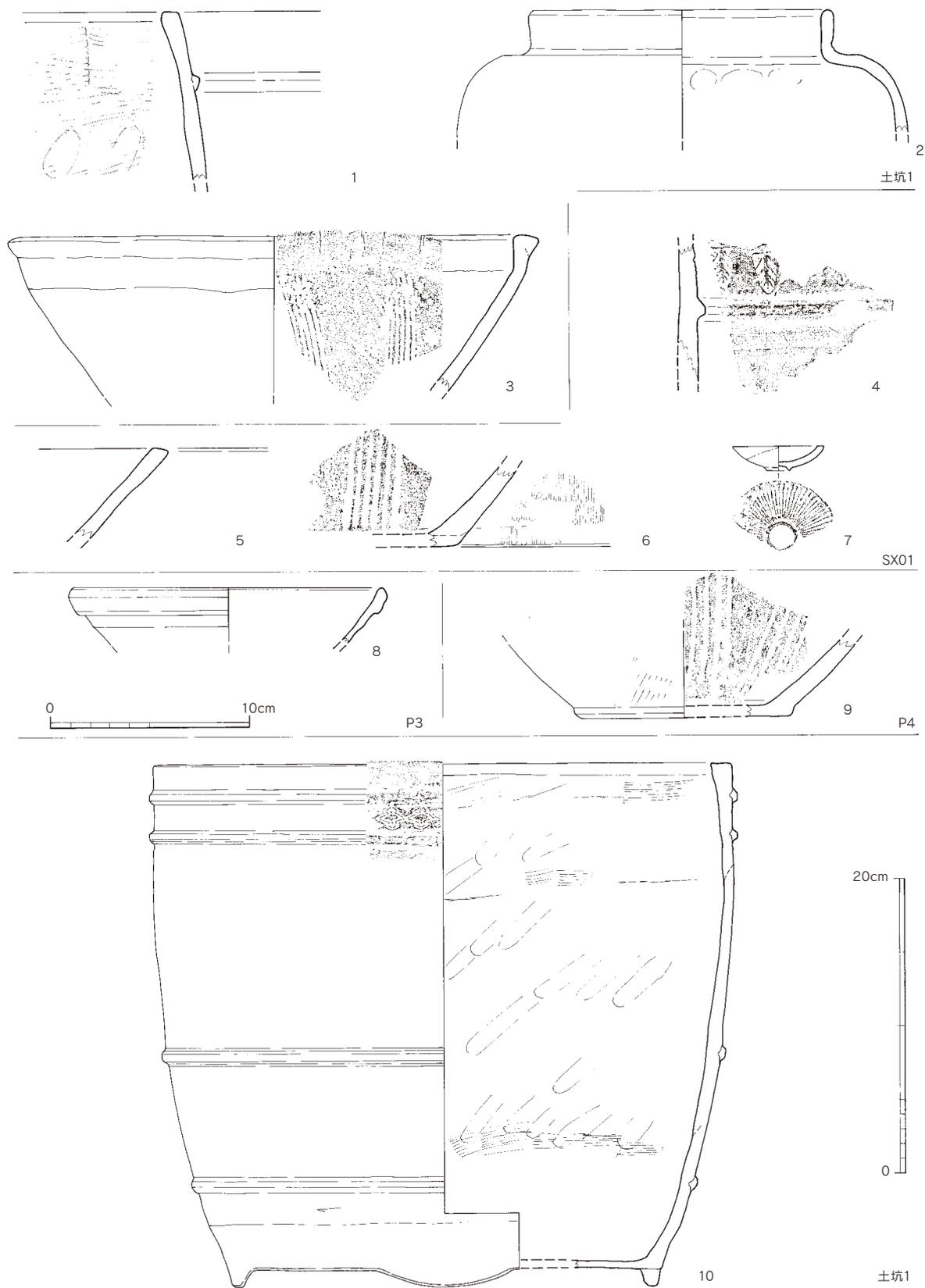
4・5は瓦質土器である。4は鉢の胴部片である。断面台形の突帯上に、木の葉形のスタンプが4つ残る。口縁部に近いものと考えられる。内外面ともにナデを施す。5は鉢形土器の口縁部破片である。内外面ともにナデを施し、播鉢である可能性もある。6は土師質土器の播鉢である。底部

付近のみが残存している。外面にはハケ目が残り、内面には6本単位の播り目を施す。他の例に比べて播り目の幅がやや大きい。7は白磁の紅皿である。口径4.6cm、高台部径1.3cmを測る。外面には底部を中心として菊花文を施し、一部に釉がかかる。11は土鈴である。玉部は3cmほどで、その上部に1cmほどの鈕部分が付く。玉部には幅0.6～0.8cmの切込みが入り、鈕には



第5図 土坑実測図(1/30)

径0.4cmの孔が穿たれる。玉部中央やや上よりに薄い沈線が見られる。14は石臼の下臼である。復元径は17cmほどで、厚さは3.9cmである。上面に溝幅約2.5cmで擦り目が施される。花崗岩製である。



第6図 出土土器実測図 (1~9は1/3、10は1/4)

#### 4 その他の遺構

##### 1号ピット (図版2、第7図)

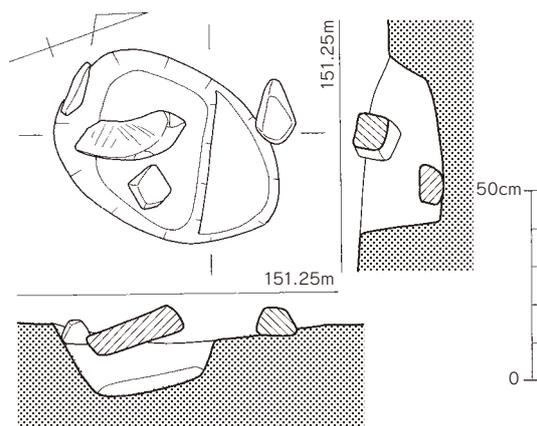
調査区の南側中央に位置する。60cm × 35cm ほどの大きさで、深さは 20cm ほどである。埋土上面から石臼の破片が出土している。また、埋土中からは土玉が出土した。この他にも図化には耐えないものの、瓦質土器片が出土している。

##### 出土土製品・石製品 (図版3、第8図)

12は土玉である。径1.3cmで球形を呈する。11のような土鈴の玉である可能性もある。16は石臼である。粉挽臼の上臼である。ピットからは破片で出土していたが接合し、ほぼ完形品である。径は31.6cm、厚さ9.9cmで中央に径3cm、深さ2.5cmの軸受け孔がある。中央から約5cm外側には外孔4.5 × 5.5cm、内孔2 × 3cmの投入孔が貫通している。側面の底部から2cmほど上部には、2 × 3.5cm、深さ5cmの木製取手を差し込む長方形の孔が穿たれている。上面は径20cmほどで1cmほど下がっており、外縁部を形成している。下面は、6分割の播り目が施されており、溝幅は2～2.5cmで各単位6・7本みられる。中央が1cmほど凹んでおり、凹レンズ状を呈する。凝灰岩製である。

##### その他の出土土器 (図版3、第6・8図)

8は白磁碗である。復元口径15.4cmで、口縁部は玉縁形を呈す。P3出土。9は瓦質土器播鉢である。復元底径10.4cmで平底を呈する。外面の一部にはハケ目が残り、内面はナデの後、4本単位の播り目を施す。P4出土。13は明銭である。径2.6cm、厚0.15cmで中央に0.45cm四方の孔が開いている。明の弘治通宝で1503年以降に鑄造されたものである。攪乱出土。15は石臼の上臼である。復元径19.4cmでドーム状になる。側面の底部から1.5cmほど上部には2 × 1.5 + α cm、深さ3 + α cmの木製取手を差し込む長方形の孔が穿たれている。下面はほとんど残存していないが、溝幅1.5～2.5cmで播り目が6本施され、かろうじて隣の分割面の擦り目が1本確認できる。攪乱出土。



第7図 P-1 遺物出土状況実測図 (1 / 20)

## IV おわりに

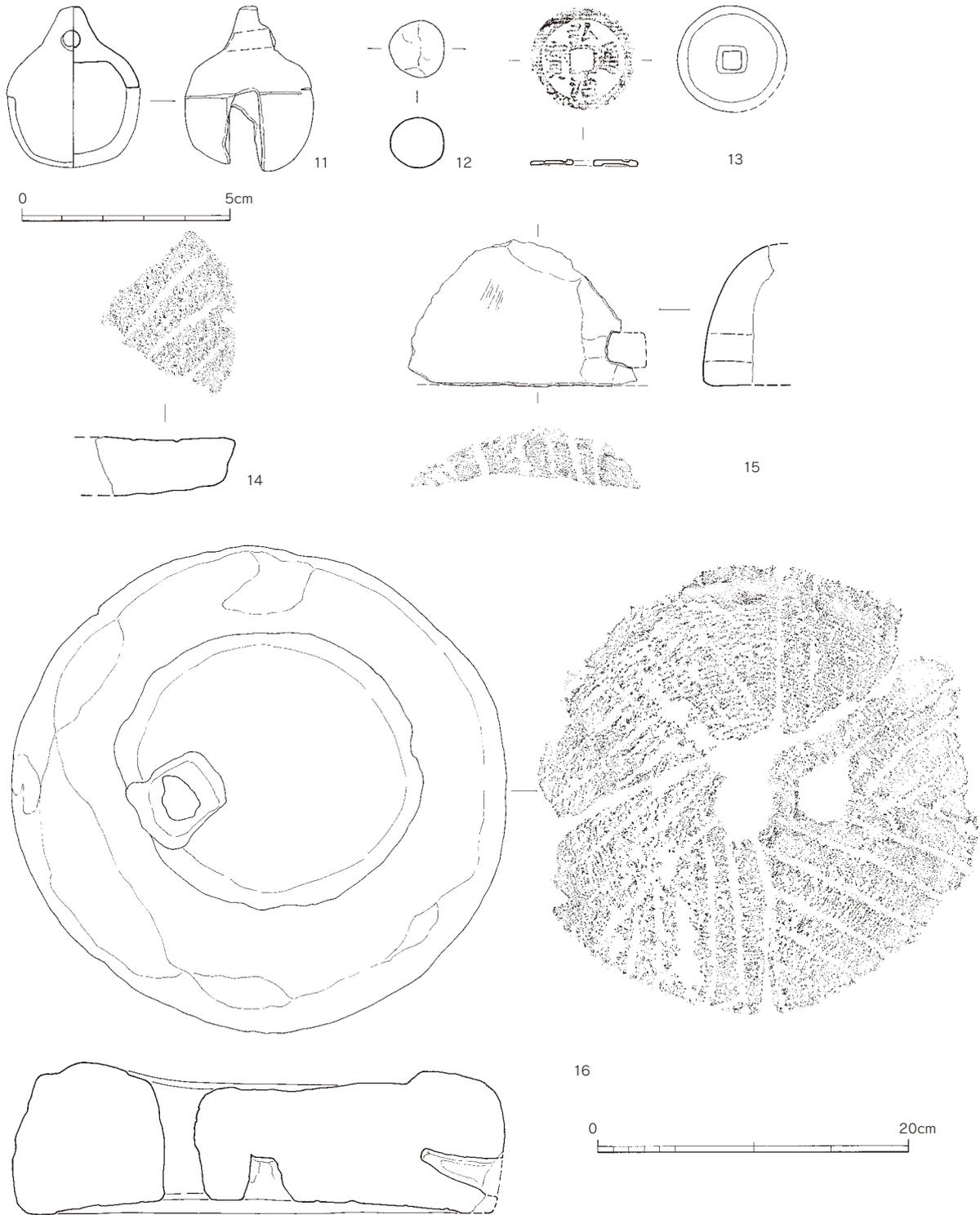
今回の調査面積は狭小で、土坑・段落ちを検出したもののその数は少なく、遺構の大半はピットであった。また、出土遺物もわずかであるが、限られた成果の中で言及できる内容についてまとめることとする。

### 段落ちと周辺地形

本調査で確認された土坑からは中世の土器が、また段落ちからは中世の遺物を中心とするが、一部近世の遺物も出土した。また、調査範囲東側は遺構密度が希薄であり、1段下がった田からは試掘調査により遺構が認められなかった。このことから、本丘陵は、もともとは東から西に下る斜面であったと推測される。街道とは直線距離で約150mしか離れていないが、比高差は10m以

上あり、その間に試掘調査で旧河川が存在していたことが示唆されている。これらのことから、丘陵は大きく見積もっても現地形より西方向に 10m、南北方向に 10m 内外ほどしか広がらず、近世以降の段造成において削平されているものの、もともと狭小な丘陵であったと想定される。

出土遺物は 12 世紀、14 世紀～15 世紀、近世に属するものであり、本遺跡は中近世に属す



第 8 図 土製品・銭貨・石臼実測図 (1～3は 2 / 3、4～6は 1 / 4)

るといえる。当地における中近世は、秋月街道が機能していた時期であり、街道を見下ろせる位置にあるため本遺跡も街道と無関係ではないだろう。しかし、遺跡は土坑を除けば、いくらかのピットがあるのみで、削平されたことを引いて考えても、集落としての体をなすとは考えられない。推測に推測を重ねることになるが、一時的な監視小屋のようなものやもしくは街道に近いことを利用して木材などを取るためのキャンプサイトの的なものであった可能性もあろう。

第1表 出土遺物一覧表

( ) 内は残存値

図	番号	図版	実測 番号	種類	器種	出土地点	長・径 (cm)	幅・底径 (cm)	厚・高 (cm)	重量 (g)	備考
6	1		4	瓦質土器	鉢	1号土坑			(8.6)		
6	2		3	瓦質土器	壺	1号土坑	15.2		(6.3)		
6	3		1	瓦質土器	播鉢	1号土坑	16.6		(8.0)		播り目1単位6本
6	4	3	8	瓦質土器	鉢	SX01			(7.1)		胴部片、木葉文
6	5		7	瓦質土器	播鉢?	SX01			(4.7)		
6	6		9	土師質土器	播鉢	SX01			(4.1)		播り目1単位6本
6	7	3	10	白磁	紅皿	SX01	4.6	1.3	1.2		
6	8		5	白磁	碗	P-3	17.6		(2.7)		
6	9		6	瓦質土器	播鉢	P-4		10.8	(4.0)		播り目1単位4本
6	10	3	2	瓦質土器	深鉢	1号土坑	39.0	28.7	35.45		奈良火鉢、松皮菱
8	11	3	11	土製品	土鈴	SX01	3.9	3.2	3.1	15.21	
8	12			土製品	土玉	P-1	1.3			2.24	
8	13	3		銅製品	銭貨	攪乱	2.6			1.91	弘治通宝
8	14		13	石製品	石臼	SX01	17.0		3.9	(456)	
8	15		14	石製品	石臼	攪乱	19.4		(9.1)	(527)	
8	16	3		石製品	石臼	P-1	31.6		9.9	1200	

1. 遺跡上空より  
古処山系を望む  
(北から)



2. 遺跡上空より  
嘉穂盆地を望む  
(南から)





1. 1号土坑（西から）



2. 1号土坑完掘（西から）



3. P-1 出土状況（西から）



6图4



6图10



6图10



6图10



8图11



8图11



8图16



8图16



8图13



6图7

## 報告書抄録

ふりがな	のとりいせき
書名	野鳥遺跡
副書名	一般国道 322 号八丁峠道路建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	城門義廣
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208 - 3
発行年月日	平成 24 (2012) 年 3 月 26 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' "	° / ' "		(m <sup>2</sup> )	
のとりいせき 野鳥遺跡	かましだ いりき 嘉麻市大 力 766-1	4022 73	2180	33° 30' 42"	130° 42' 20"	2009.2.10 ～ 2009.3.19	435	国道 322 号 八丁峠道路 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野鳥遺跡	集落跡	中近世	土坑・段落ち・ピット	土師器・瓦質土器・土鈴・石臼	

**遺跡の概要：**

野鳥遺跡は、古処山系に源を發し北流する千手川の東側、標高 150m 前後の河岸段丘上に位置している。調査区東側はほとんど遺構がなく、田の整備に伴い削平されたものと考えられる。

検出された遺構は、調査区西側の土坑・段落ちとピット群である。段落ちからは土師器・瓦質土器の他、土鈴が出土した。ピット群はほとんどが深さ 30 cm 以下のもので、建物の推定は出来ない。

遺物は土師器・瓦質土器のほか石臼、近世の紅皿、明銭などがパンケース 1 箱分出土した。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 23	登録番号 0003

<p><b>野鳥遺跡</b></p> <p>—福岡県嘉麻市大力所在遺跡の調査—</p> <p>一般国道 322 号八丁峠道路建設関係 埋蔵文化財発掘調査報告書</p> <p>平成 24 年 3 月 26 日</p> <p>発行 九州歴史資料館</p> <p>〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208 - 3</p> <p>印刷 株式会社 三光</p>
---